

## 「キ」ノ部

さいづち 「木槌」

○しエーぢち 右ニ全ジ。金槌ハ「はなちゝ」

さうーす「相」 人相、家相、地相ナドノ禍福ヲ見ル

○そーじる 「相す」ノ意ヲ転用シテ、人物等ヲ相シ

テコレヲ肝煎ルコトニ用サル。例「嫁ヲそーじる」

(嫁御ヲ物色シテ肝煎ルコト)、「家ヲそーじる」

(家ヲ探シテ周旋スルコト)

さうらう 「候」 他語ニ添ヘテ、タダ敬意ヲ表スル話

トシテ用キラル

○しヨーリ さうらへニ当ル、用法右ニ全ジ 例「内

に入りしヨーリ」

さかむかへ 「境迎」 到着ノ人ヲ路ニ出デテ迎フルコ

ト

○さかむけ 右ニ全ジ。島ノ旅ハ船ニヨルヲ以テ当ラ

ザルモ、ナホ「さかむけ」ト云ヒシガ、コノ話次  
第二「ふなむけ」(船迎)トナル

さかもり 「酒盛」 酒宴

○さかむゐ 右ニ全ジ

さかやき 「月代」 男子ノ額髪ノ生涯ヲ半月形ニ抜キ  
アゲオクモノ

○さかやき 剃刀ニテ顔ノ髻ヲ剃ルコトニ云フ、右ノ  
転用ナルベシ

さかむけ 「逆剥」 手ノ爪際ノ皮ヲ逆ニ剥グルコト

○さんけ 右ニ全ジ

さかしほ 「酒塩」 物ヲ煮ルニ味ヲ添ヘムトテ、酒ヲ  
加ヘルコト

○さかしユ 右ニ全ジ

さくし モロシ、破レ易シ

○さくさ 右ニ全ジ 「さくさノ米」(粘リ気ノナキ米)

さくり 「決」 土ヲ掘リ起シテ、細長クさくり起シテ  
作レル溝

○さくい 右ニ全ジ

さくる 「決」 剝ル、穿ツ

○さくる 右ニ全ジ。例「小刀ニテ足ヲさくる」

ささら 台所道具ノ一、物ノ汚物ヲ擦リ洗フニ用ル

○そーら 右ニ全ジ

さし「差」 差荷ノ下畧

○さし 差荷ヲ棒ヲ云フ

さす 「鎖」 閉ツ、シメル

○さし さすノ名詞形、錠前ヲ云フ

さしなは 「差繩」 乗馬ノロニツケテ曳ク繩

○さしにヨー 物ヲ束ヌル繩ニイフ。スベテ「なは」  
ハ「にヨー」ト訛ル。

さじき 「棧敷」 見物場ニ仮ニ設ケタル観覧席

○さんしき 右ニ全ジ、さずき(仮ニ講ヘダル床モ  
全ジクさんしきナリ)

さす「撃」 サシアグ、サヅグ

○さす 右ニ全ジ 例「腰方さされぬ」

さた「沙汰」 評判

○さた 右ニ全ジ

さだつ 「騒立」 サワギタツ

○さだち さだつノ名詞形。驟雨、夕立雨ヲ云フ。南  
薩ニテモ同ジ

さで 「又手」 又手綱ニ全ジ、スクヒアミ

○さでイ 構造モさでニ全ジ

さても 「扱」 然ルカト感ジテ発スル声、後世「さッ  
ても」ト云フ

○さッてイむ 右ニ全ジ、例「さッてイむ見事ナ行ヒ」  
ちてさッ

○さてイさてイ 用例ハ左ニ全ジ

宇治拾遺「アリノマヽノ事ヲ語りケレバさてイさ  
てイト言ヒテ、笑フモノアリ」

さと 「里」 田舎、在郷

○さとウ 右ノ意ノミニ用ル

さとびと 「里人」 在地ノ人

○さとウチュ 田舎ノ人、「ちユ」ハひとノひノ畧、  
トノ転

さばく 「捌」 理非ヲ別チ決ス

○さばくる 右ノ意ヲ転用シテ、詮議、干渉ノ意ニ云  
フ

さびれる 「荒」 オトロフ

○さびりる 右ニ全ジ

さぶしき 「雑色」 小男、下男

○じョーしき 煮炊ノ業、又ハコレニ従フモノ、例「家

ニ居テじョーしきラスル」妻ガイナイカラじョー

しきヲ頼ム

さぶ 「障」 ササフ、サヘギル

○せーる 口語さへるニ当ル。用法セマク、火事ヲ鎮  
メ喧嘩ヲ押フル時位ニノミ用ララル

さぶすゐ 「雑炊」

○どウーし 右ニ全ジ

さまたげ 「妨」 邪魔、妨害

○さまちやぎさ 妨ケニナル有様ノ意 例「さまちや  
ぎさノ子供ダ」

さんよう 「算用」 計算、勘定

○さんにヨー 右ニ全ジ、又さんみんとモ云フ。「算  
見ル」ノ意カ

さゆ 「冴」 清ク澄ム

○される 右ニ全ジ 例「今夜ハ月ガされて美シイ」  
さらす 「晒」 (一)日光風雨ノアタルマヽニナシオク  
(二)漂白、布ヲさらすノ如ク

○さらす 右ノ意ニ用ル 自動詞「される」

さらふ 「浚」 (一)埋リタルモノヲ掘リ除ク (二)塵ヲ拂

ヒ除ク、掃除ス

○される。さぶれる。さらふるコトノ軽易ナル場合ハ  
される。例「茶滓ヲされる」 重きハさぶれる。  
例「庭ヲさぶれる」「溝ヲさぶれる」

さわだつ 「騒立」 ザワメク、ザワツク

○そーだち さわだつノ名詞形、肝<sup>キム</sup>ト結ビテ熟語ヲナ  
シ「きむ・そーだち」心ノザワツク意ナリ

さをいれ 「竿人」 古検地ヲ改メ検スルコト

○そーいり 右ニ全ジ

## 「し」ノ部

しかと 「睨」 (一)シツカリト (二)分明ニ。間違ヒナク

○しかいとウ 右ニ全ジ。しかしかはるくろくノ意ニ

相似タリ。例「しかしか物モ言ハヌ」

しかふ 「仕替」 改メテスル。シナホス

○しこる 右ヲ転用シテ支度、準備ノ意ニ云フ。例「才  
宮詣ニ美シクシテ行ク」「機織ノしこいヲスル」

しく 「如」 及ブ、届ク、肩ヲ比<sup>ナ</sup>フ

○しく 意ハ相合ジキモ用法ヤ、異ナリ、活用セズ。

例「才前ハ彼レガしくナラヌ」「朧月夜ノしくナ  
ルモノハナイ」ノ如ク云フ

しげし 「繁」 (一)細カニシテ多シ (二)屢々ナリ

○しぎしヤ 右ニ全ジ

しし「肉」「穴」 肉ニ全ジ

○しし 右ニ全ジ 例「井ノしし」勇ミ立チテ、肉

躍ルハしし振<sup>ブ</sup>リ

しぞく 「退」 しりぞくニ全ジ

○すずく 退ク意ト共ニ場所ノ一方ニ退クコトニモ用

キル

したたか 「健」 甚シク

○したたか 右ニ全ジ

したむ 「溜」 液ヲシタタラス

○ついたむ 右ニ全ジ。雨ノ雫ノ「シタタル」モ全ジ

クイフ

したも 「下裳」 女ノ裳、衣ノ下ニ着レバ云フトゾ

○したむん 女ノ腰巻ヲイフ。但シ腰巻ハ島旧来ノモ  
ノニアラズ、鹿児島ノしたもんニ全ジカルベシ、  
アルバ下物<sup>シタモ</sup>ノ義カ。何レニセヨ拾玉集「君知ルヤ  
下裳ノ紐ヲ解キ初メテ、君ト契ヲ結ブ夜トハ」ノ

「下裳」トハ相通ズル如シ  
「下裳」トハ相通ズル如シ

しだる 「垂」 枝ノ下ニ巫ルコト

○しだらない 「枝垂れ生る」ノ義、単ニしだるノ動

詞ハナシ、果物ノ実ノ鈴生シタルヲしだらないト

云フ

したり (一)ナシ得タリ 為<sup>ナ</sup>スマシタリ (二)矢敗シタル時

ニ云フ語

○しつたい。しつたいひヤー 右ニ全ジ、例ヘバ踊リ

ノ上手ナルヲ賞メテ「しつたいひヤー」トハヤス  
如シ。又他人ノ失敗ヲ嘲リテ「しつたい」「やぐい・

しつたい」トイフコトアリ、転ジテ事ノワガ意ノ  
如クナラザルトキ「しつたい思<sup>ウ</sup>らぬ」ノ如クモ云  
フ

しつらふ 取締フ

○しつイれー 転用シテ、人ノ取締ヒタルサマシタル

ニ云フ。斯カルサマシタルヲ「しつイれむん」国  
語「へつらふ」ハ「しつらふ」ノ転ナルベシ

しづる 草木ノ上ニ積レル雪ノ解ケタルガ、枯葉ノ間ヨ  
リ漏リ落ツ

○すずりる 広ク物ノ上ヨリスベリオツルコトニイフ  
或ハ「すべる」ノ訛カ。語感ヨリハ「しづる」ノ  
様ニ覺ユ

○シユーたるさ 汐水ニ濡レテジメジメスルニ云フ

しほばな 「塩花」 白浪(波浪ノ立ツハ花ノ如カレバ云フ)

○シユーばな 潮ノ岩礁ニ碎ケテ飛散スルヲイフ。白浪・塩花ニテハヤゝ当ラザル如シ

しほかがり 「潮撃」 潮時ヲ待チテ、船ヲ泊ムルコト

○シユーがかい 右ニ全ジ

しほや 「塩屋」 塩焼小屋

○シユーや 右ニ全ジ

しま 「島」 狭又ハ締シマノ義

○しま 所謂「島」ト共ニ村里ノ義ニ用ヰル。南島皆然リ。コレヨリ見レバ「島」ハ栖間ノ義トモ思ハル、或ハ「しま」ト村里ノ「しま」トハ別々ノ語ナルカ

しまつ 「始末」 (一)整到 (二)ワケガラ (三)節約

○しまち 右夫々ノ意ニ用ヰル、手ニオヘヌヲ「しまちセラレヌ子供」ノ如クイフハ(一)ノ転用ナルベシ

しまひ 「仕舞」 シマツスルコト

○しめー。しめ 右ニ全ジ

しまふ 「仕舞」 為シ終マフ

○しもる 右ニ全ジ 例「家普請ヲしもる」

しみじみ 「泌々」 シメヤカニ、心ヲ深く染ミテ

○しんじんとウ 右ニ全ジ 例「しんじんとウ悲シクナル」

しんき 「新規」 スベテノ物事ヲ新タニスルコト

○しんき 家ノ新築ノ場合ニノミ云フ、例「家ヲしんきニ造ル」 「しんき家」

しんどう 辛勞の訛 ホネヲリ

○しんどう 導ヲホネヲリノ義ニ用ヰル。例「しんどうシテクレテ有難イ」

しんしゃく 「斟酌」 控ヘ目ニスルコト

○しんしゃく 右ノ意、殊ニ饗応等ニ対シテ遠慮ガナルニ云フ。例「しんしゃくシナイデ沢山食べ」

しんべう 「神妙」 殊勝、奇特

○しんべう 真面目ニ慎ミフカキニ云フ。例「人前デハしんべうニシテキル」

しんぶく 「心服」 心より従フコト。

○しんぶく 右ニ全ジ

しめじ 「占治」 覃類ノ名

○しめじ 右ニ全ジ

しやう 「正」 タダシキコト、マコトナルコト

○しよー 右ノ意ニヨリ様々ニ用ヰル、国語ニハナキ用例ナルベシ、「オ前ノ云フコトハしよーセラレヌ」(真実ト受取レヌ)コレヲ重ネテ「しよーじよートウ」ト云ヒ「しよーじよートウソソナコトガアツタカ」(本当ニソソナ事ガアツタカ)「事」ト合セテ「しよー事」トイヒ「オ前ノ言フ事ハしよー事カ」(真実デアアルカ)

しやう 「性」 (一)性質 (二)陰陽家ノ語 (三)タマシヒ

精神

○しよー 右夫々ノ意ニ用ヰル

じやう 「状」 書状

○じよー 右ニ全ジ、今ハ廢語ニ属ス

しやうじん 「精進」 (一)身ヲ淨メテ潔斎スルコト (二)

膳部ニ菜蔬ノミヲ用ヰルコト

○しよーじ。しよーじん (一)ノ場合ハ「しよーじ」(二)

ノ場合ハ「しよーじん」と云フ

しやうこり 「性懲」 心ノ底ヨリ懲ルコト

○しよーくろー 右ニ全ジ。但シ「懲る」ヲ「喰ク」

ノ誤リタル形ナリ。例「アノ男ニしよーくろサレ

タ

しやうりやうまつり 「精霊祭」 盆祭

○しよーろーまつい 単ニしよーろートモ云フ

じや 「蛇」 ヲロチ、ウハバミ

○じやー 龍ト全ジク想像ノ怪獣ノ意ニノミ用ヰル

しやうたう 「正当」 正シク理ニ当ルコト

○しよーとー 正直、実直ノ意ニテ用ヰル

しやさう 「社倉」 常平倉ノ一

○しやーそー 社倉ノ例アルニヨリコノ語残ル

じやひせん 「蛇皮線」

○さんしる 構造ハ蛇皮線ニ全ク全ジキモ、普通アル

モノハ、洗紙ヲ以テ胴ヲ貼ル、蛇皮ヲ張レルハ

「じやひばい」ト云ヒ上等ノモノナリ

しやリ 「舍利」 梵語、死骸ヲ火葬シタル残骨

○サネイ 骸骨ノ意ナリ、或ハ「されほね」ノ約カト

モ思ハル、「されかうべ」(髑髏)ノ如ク

しゆう 「主」 己レヲ用ヰル主人

○しよー 主人、身分ヨキ人、己レノ父(尊称) 夫々

ノ意ニ用ヰル

しゅび 「首尾」 始末、結果

○シユビ 右ニ全ジ、疊シテ「ビー」トモイヒ「ビー

取ラヌ」「ビー打タヌ」ノ如ク用キル

シユげふ 「修業」 学ビ習フコト

○シユギョー、しぎョー 右ニ全ジ

シヨたい 「世帯」 家産、生計

○シユエー 右ノ意ノ外主要食品ライフコトアリ

シヨせい 「書生」 学生

○シユせい。シユセー 右ニ全ジ

シヨク 「卓」 「字の唐音」 机ノ脚ノ高キモノ

○シク 脚ノ高低ニヨラズ机ライフ

しらが 「白髪」 しらかみ(白髪)ノ略 (一)白髪 (二)

摩苧ノ異名

○シヤーが 麻苧ニハイハズ蚕糸ヲ称ス。白髪ハ

「シヤーギ」(白毛の義)ナリ

しらが 「精」、米ヲ搗キ糠ヲ去リテ白クナス

○シヤーぎる 右ニ全ジ、しらがよね(精米)ハシヤー

ぎぐみ

しらしらと 「白々」 夜ノ明ケ行ク状

○シヤーシヤーとウ 右ニ全ジ

著聞集「夜ノしらしらト明ケ渡ル程ニ怪シク犬ノ吠エ

候ヲ」ノ用例ニ全ジ

しるし 「効験」 キキメ、カヒ

○しるし 右ニ全ジ

しるまし 「怪」 アヤシムベキ前兆 前表

○ひんましヤ 沖繩ニハひるまさノ語アリテ「奇怪」

「珍シイ」ノ意ヲアラハス。えらぶ方言ニテハ、

奇怪ノ義ハ稀薄トナリ「タマニシカナイ珍ラシイ

コト」ノ意ニ用キル。例ヘバ「吝嗇坊ノ何某ガ御

馳走ヲシタ」「イヤソレハひんましヤナル事デア

ル」ノ如シ。コレガ更ニ転用セラレテ「人モテナ

シノ良キコト」トナル。例「彼女ハ中々ひんましヤ

ナル女ダ」ノ如シ。原意ヨリ可成リノ飛躍アルモ

「有り難シ」即チ「世ニ稀ナリ」が感謝ノ心ヲ表

スル語」トナリシヲ併セ考フレバ、自ラ首肯シ得

ラルベシ

しろ 「代」 其ノカハリトナルモノ。カハリ

○シユ 右ニ全ジ 例「米ノシユオ金ヲ取ツタ」

しをらし 柔順ニシテ憐ムベシ。カハユラシ

○シユーらしヤ 可愛ラシ。愛嬌アリノ心持ヲ多ク含

ム。例「シユーらしヤノ童」「シユーらしヤノ女」

しをれる 「萎」 しをるノ口語。撓ヒ弱ル。撓ミ凋ム

○そーりる 草木ノ花、葉ナドノ撓ビ弱レル様ニ云フ

古今集「吹クカラニ秋ノ草木ノしをるれば」ノ用

例ニ適フ

しをーる 「為居」 ナシラル

○シユん 右ニ全ジ 例「今、仕事シユん」

### 「ず」ノ部

すかす 「賺」 (一)欺キ誘フ、ダマス (二)慰メナダム

○しかす。へーしかす。(一)ノ場合ハしかすニテ、小兒

ヲアヤスコトニ用キル(一)ノ場合ハへー・しかす

(早賺スノ義カ)トイフ。例「彼ニへー、しかさッ

て金子ヲトラレタ」

すぎる 「過」 すぐノ口語形 程ヲ超ユ

○しぎる 程度ヲ超エテ功利的ノ知恵ヲ働カスコトニ

云フ。例「彼ノ子ハしぎリテ居ルカラ金ハツカハ

ヌ」斯カルモノヲ「しぎリ者」「たまししぎら」

すぐる 「勝」 勝ル、秀ツ

○すぐる 右ニ全ジ 例「彼ノ子ハすぐリテ学問が出

来ル」

○しる 右ニ全ジ

すっぱり スツカリ、サツパリ

○すっぱい スツカリノ意、サツパリノ場合ハすっぱとウト云フ。例「木ノ枝ヲ拂ツタノデすぱとウナツタ」

すへる 「鱧」 すゆニ全ジ。飲食物ノ腐敗シテ酸味ヲ

生ズ

○スイーる 右ニ全ジ

すぼむ 「窄」 末次第二細ク狭クナル

○すぶむ 右ニ全ジ。眼ノ細キヲ「目すぶ」ナド云フすもる 「般」 巢守ノ義。卵ノ皆孵リテ巢立チタル後

ニ孵ラデ巢ノ中ニ残レルモノ

○すむる 右ヲ転用シテ、スベテ卵ノ腐リタルモノヲ

云フ。腐卵

するす 「磨白」 すりうすノ畧

○スイるすイ 右ニ全ジ

## えらぶ語の姿

住みなれてあればこそあれ渡津海の

離れ小島の秋の夕暮

島の生みし歌人、土持綱安大人の歌である。

住みなれてあればこそあれ——まことにさうである。果して知らぬ大海の真只中にぼつりと浮んだ島影、巨涛の一蹴にもえ堪ふまじきはかない姿をしてゐるではないか。若し北に徳之島・大島、南に輿論・沖繩・伊平屋の嶋々が隣合つてゐなかつたら、それはいかに頼りなくもまた寂しいものであらう。

でも島はなつかしい、慕はしい。「故里の山に向ひていふことなし、故里の山は有り難きかな」(啄木) 江山水美是吾郷である。今静かに眼をつむれば、あか／＼と海の果てに沈みて行く夕陽の影を望みつゝ、天つみ空の人を恋ひ、遠つ国の山河を胸に画きし少時の自分の姿が浮び出て来る。更に想を馳すれば、遠つ祖の人々が雲を隔て、霞を透してわが眼路の彼方を往き交ふ如くに覺える。

さて「えらぶ人」の祖先は—たい何処からこの島に移り住んだのであらう。南よりか、はた北よりか。そしてそれは新島開拓の希望と勇氣とに満々たる若き男女の一隊であつたらうか。それとも強者の制圧に押しすくめら

れてこの島をさして落ち延びた敗残者の群であつたらうか。島の旧家に残る記録によれば、琉球が中南北の三山

に分裂した時代、北山王の第二子真松千代といふが、島の主たる印綬を帯びてこの島に渡つたといふのである。

それは今を距る僅かに五百四十年(西暦一三九四年)の

昔ではないか。島の黎明は更にこれを遡らねばなるまい。

しかも山海語らず、日月また黙々として下界の推移を俯瞰するのみ。

この中であつて、無形ながらも遠つ祖の世々の形見として伝へ来つて今日に及ぶのは言の葉である。言葉は時の流と共に発生消滅変遷の現象を繰返していくのであるから、われ等の有する言葉の全部が遠い昔の姿そのままでないことは勿論である。しかし少なくともその百分の一乃至は千分の一は幾千年以前のものであるといへよう。

英人で東京帝大の教授たりしチャンパレン博士は、明治二十七年沖繩に渡つて研究の結果

日本語と琉球語の祖語なるものがあつたとしたら、日本語は其の祖語の或部分を忠実に保存し、琉球語は其の祖語の他の部分を忠実に保存してゐる。而も

近代の日本語が上世の日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表することが一入忠実である。

と發表した。それはひとり琉球語において言われるのみでなく、えらぶ語においても又同様である。

「えらぶ」は往時その政治的關係が琉球と密接なるばかりでなく、その言語關係においても琉球語の中に包括せられるとは学者の定説である。沖繩最古の辞書なりという混効験集(二百二十四年前の編纂・西暦一七一〇年)に載せられた言葉の大部分はえらぶ人には容易に理解が出来るように思ふ。何分右の混効験集は内裏言葉であるがために、御御の敬称がつき、また職名、器物名に特殊のものがあつて理解を苦しめるが、これ等を除いてしまへばその相異点は著しく減少せられるのみでなく、彼地においては明滅の境にある語が、今なほ日常語として用ゐられつつあることを信ずる。

然れば、チャンパレンの「近代日本語が上世の日本語を代表するより云々」は同時にえらぶ語にも当て筈のみでなく、「古代国語の忠実なる保存者」たる点において相譲らないと言ひ得る——これは同時に奄美大島諸島もであるが。

つぎに薩摩との関係を考へてみるに、慶長年間その直轄となつてよりは、彼我の交渉は愈々繁くなり、代官所役人の駐在、船頭の出入、島民子弟の修学に上鹿児島する等々、さまざまの事情が自ら言葉にも影響を及ぼして、従来行はれ来つた語彙に数を加へ、或は新来の言葉に压倒せられて旧いものが影を没する等さまざまの現象の起つたことが想像せられる。左に薩摩よりの直輸入なりと思う二、三の例を示すと、

安堵する(飽くこと)。案の定。えじ(ずるいこと)。

シュダ(怪態なること)。雪隠、閑所(共に便所)。

簡約。横道者。横柄。したもん(腰巻のこと)。ぼっ

けもん(木強者)。

等である。試みに鹿児島方言集(明治二十九年出版)に採録せられてあるものを見渡すと、大半はえらぶ語と団体であり、しかし鹿児島市のあたりでは既に廃語に属してあるものが、島では今なほ日常の用語となつてゐるのが数あることを知るのである。

ここに詳述の邊を持たないのであるが、音韻転訛の状態、表出の形式等より眺めた時、琉球語と鹿児島語(南九州語)とは類似の点が可成りに多いのである。元より

国語の「わづらふ」は病氣のことである。ところが方言では病氣看護の意となり、更にそれが飼育・飼養の意に転換して、牛をわづらふ、豚をわづらふとは雀海に入つて蛤となるの類か。

□ 方言で、牛馬を飼ふことを「つなぐ」(繫)といひ、牛飼は牛つなぎ部である。これを口縄をつけて草原に放牧した名残を言葉の上に留めるものであり、また豚小屋を「まき」といふは牧即ち牧場の義なるべく、これも牛馬同様放牧の時代のありしを物語るものであらう。

□ 方言中、簡約の意を表はす語に、つましゃ(約しの意)ふまさ(細し、物をおろそかにせぬ意よりの転用)簡約、簡約がある。最初は、「つましゃ」「ふまさ」であつたらうが、新来の漢語、簡約・儉約にその勢を压倒されたに相違ない。ところが消費節約といふその筋の宣伝が利きすぎて、今は節約の時代となり、旧来の四語は封印を施されてゐるといふ。

□ 方言「あーひれる」は居平るとも訳すべき言葉で、坐

方言の分類は、牛と馬、犬と猿の如く截然たるものではなく、南九州語の円圏をもつと拡大すれば琉球語はその中に包含せらるべく、また反対に琉球語の円圏を拡大すれば南九州語も同一円内に入るべく、共に国語の古き姿を保有する点において、靈犀相通するものあるを疑はない。それ等の問題はともかくとして「えらぶ語」は——全時に奄美大島の言葉は——琉球語を経とし、鹿児島語を緯として織りなされたものと見ることが出来ようと思ふのである。

次に二、三「えらぶ語」の興味あるものを記してこの稿のをはりとしたい。

□ 国語に、すもり「般」——孵らないで巢の中に残つてゐるもの——巢守の義、そだつ「育」——巢立つの義の二語がある。方言において「すもり」は腐卵の意に転用せられ「かえる」の意ある、「すでいる」(巢出るの義)の語がある。

巢守る、巢出る、巢立つ、かうならべて見ると、卵の雛鳥にかはるさまが窺はれて面白いではないか。

り込んで中々お尻を上げない貌である。これを少しもぢつて「あびりる」と言へば、「飽く」の転用に無理はない。所領安堵の「安堵」が鹿児島に入つて(?) 飽くの意となり「落着食つて安堵した」と輸入せられ、原意の忘れられてゐるのと相似てゐる。

□ 国語「あひしらひ」は方言「あひしれ」で、同様もてなすこと、接待の意である。これを「えーひれ」といふときは「交際」となり、「人のえーひれに中々忙しい」と用ゐ、更に畧して「ひれ」といへば「折合ひ」であり、「親びれ」「夫びれ」の熟語にしてつかひこなすとは、中々賢いと言はねばなるまい。

□ 国語の「かならず」は、方言の「はならじ」で、同様たしかに、相違なくであるが、これを引き延べて「はならーじ」にすれば「必ずしも」の意に一転する。また「かしら」は上長の意、はしやはあたま又は髪在意「なま」は今「なんま」は今先、こんな言ひ方の区別は一寸国語に見出しにくいではあるまいか。御幸を「ごこう」「みゆき」と音訓に読んで意義を異にする例がないではない

が。

租税賦課のために、資産の等級を定めることを、「えーろーを取る」といひ、その等級の上ることを「えーろーの上る」といふ。「えーろー」とは榮勞にして、家産の榮え勞れであるとは古文書の教へてくれたところ。但し和漢の辞書には一寸見出さず、或は薩琉何れかの公用語か。今一つ「失脚」の語を辞書で引くと「足を踏み外すことしそこなひ」としか出て来ないが、これを失費の義に用ゐ、方言で「しつちやく倒れ」は経費倒れである。これも恐らく薩摩特有の用語でもあらう。その証拠には、南洲先生の土持政照に書興へた官林沸下の願書草案の中にも「自分失脚を以て造立仕度御座候」とあるし、その他文書でも見たから、失費の意に相違ない。

### 「あやかし」の語について

「あやかし」の語は、おそらく現在の国語中、廢語乃至は死語に近いもの一つであると思ふ。試みに、これを手元にある辞書について見ると、

物ぬ あやかしゅん  
妖怪に迷はされることは  
物に あやかさゆん  
意を有する語である。例へば、妖怪の迷はすことは、

である。「物」は、物の氣即ち妖怪）  
この方言が直ちに「あやかし」の正体を突きとめたところではないが、右の辞書どもの解釈に確実性を与へる一資料たるの価値は充分にあると信じる。

即ち「あやかし」は、動詞「あやかす」の名詞形であり、語根「あや」は、物の分明ならざるさま、乃至は、似てその物に非らざる意味を有するものであつて、国語の「あやに」「あやし」の「あや」と同一の語根なることは疑ひがない。而して「あや」は感動詞「あや」あるは「あッ」より生れた語の様に思う。

次に、物の分明ならざるさま、乃至は、その物に似てその物に非ざるが「あや」なりといふ考へを押ししていく時、

- あや(文) あやし(奇) あやかる(肖)
- あやす(調戲) あゆ(肖) あやまる(過)
- あやむ(怪) あやなす(操)

大言海「前啓」倭訓栞、あやかし「俗ニ事実明白ナラザルヲあやかしナド云ヘリ」サラバ、不思議ナル義ヨリ妖怪ノ義トスルカ、サレドあやかしノ語原知ラレズ、或ハ、血ヲあやかすと云フ語ニ因ミテ不詳ノ義ニ移リタルカ、尚考フベシ (一)小判鮫ノ異名 (二)海上ノ妖怪「下畧」

金沢辞林 (一)海に出づるといふばけ物 (二)こばんざめ藤村新辞典 怪異 (一)海中にあるといふばけもの (二)能楽の船辨慶で知盛のつけるやうな面の名 (三)事柄のはつきりせぬこと

ことばの泉 「妖怪、へんげ」  
これ等によると、その解釈に多少の出入りはあるも、「怪光なるもの」といふ事においては相一致してゐる。しかも其の正体を見届けたものはないやうである。これを南島方言の一つ「えらぶ語」について見ると、

その中から同じく「あやかし」の語を発見するのである。方言「あやかし」は名詞ではなくして、一動詞であり、  
あやか さ し しゅん しゅし  
あやか さら さり さゆん さゆ さり  
の如く活用をなし、妖怪の「迷はす」又は「迷はされる」

これ等は何れも「あやかす」の「あや」に關係ある語ではないかと思ふ。そこで二、三の語を大言海と対称してみるに、

あや(文)「合へノ転カ」  
とあるも、物の文は、物に象つたものであつて、実物ではないから「あや」と云ふではあるまいか。  
あやす「調戲」俚言集覽、あやす「嬰兒ヲあやすナド云フハ、あやなすノ略カ、アシラヒ慰ムル、テウラカス

この語、右の解釈の示す如く「テウラカス」ことが第一義で、それが「アシラヒ慰ムル」義になつたものであり、方言「あやかす」の転義、省略と見て不都合ないやうに思はれる。  
あゆ「肖」似ル、アヤカル  
とのみで語原には触れてゐないが、或は「あやゆ」ではないかとも思はれる。

あやまる「誤」「過」「傷害むる事ヲ自ラ、シテカシタル意ニテモアルベキカ。  
これも正しきに似ようとして似ることが出来ないのが「あやまること」と解けば、「あや」に縁を結付けるこ



とが出来る。

あやなす「操」「縦」「文なすノ義」巧ミニテアツカフ、程ヨクアシラフ

これも「程よくあしらふ」が第一義で、それが「巧みにあつかふ」意を生じたと見れば、同じく「あや」で解積がつく様にも思ふ。

一知半解の老書生、貧しき知識と、書冊に頼りつつ禊りに先知・先覚の研鑽に対して私議を爽むは、罪万死に当るべく、また遼東の豕の嘲りを受けるであらうが、盲目蛇に怖ぢざる臆断を恕して貰ひたいのである。

## 「つじ」と「ちじ」

試みに大言海を開いて「つむじ」を見ると、三つの語が相並んでゐる。

つむじ「旋風」「つむじかぜの畧」四方へメグリテ吹

ク風(下畧)

つむじ「旋毛」「廻毛」馬ナドノ毛ニ、旋り生ヒテ、

渦ノ形シタルトコロ、人ナルハ、頃ノ百会ノ辺ニア

リ、ツジ(下畧)

り、方言では「ちじ」と呼んでゐる。今は所謂「ちじ」の面影を失つてゐるが、往時周囲が洲であった時は、高台をなしてゐるというから辻は即ち「ちじ」の意にて名付けたことが首肯されるのであらう。

ところで、最初に引出した、つむじ「旋風」、つむじ「旋毛」の二語共に、旋る意のあるところは充分に受取れるが、その語の本義には直接相触れてゐない。旋風の「つむじ」がつむじ風の畧であり、旋毛の「つむじ」がつむじ毛の畧(といふのは余の臆断であるが)とすれば、つむじの語があり、而してその語積がなくてはならぬ。然し辞書に見当たらないから、始めからなかったか乃至は失はれるか或は「じ」は接尾語の如きもので、「つむ」が語根かも知れない。幸ひ「つむ」の語はあるから、これについて見ると、

つむ「紡」「錘」「つみノ転、摘ム意。沖繩ニテハつみ

と云フ」(一)古名ツミ。紡車ノ具。(中畧)又ツモ、つ

む「摘」指ニテ取ル。撮ミ去ル(下畧)

これを概括すると、紡は摘にて、取る。去るにて、旋の意は殆んど見出し得ない。が果して紡は摘の意であらうか。余に勝手な臆断を許すならば、紡は元、動詞の活

つむじ「十字」(前條ノ語ト相通ズ)今約メテ辻ト云フ、其ノ條ヲ見ヨ(下畧)仍つて、「辻」について見ななくてはならなくなつた。

つじ「辻」(旋毛ト通ズ、其ノ略ナリ、辻は達ノ省、或ハ云フ、十字街ノ十二之繞セルトナリト)(一)古言、つむじ、路ノ縦横ニ通シタル処、ヨツツジ、十字街。

これ等を綜合して、辻即ち十字街が旋毛の旋つてゐるに準へて名付けたことが明らかである。

ところが、南島方言にては、旋毛が、やがて頃乃至は高きところを意味することになってゐる。えらぶ方言において、旋毛は「まちじ」である。「ま」は真であり、即ち「真つじ」の意である。ところが人のまちじは頭の頂辺にあるのが本体であるにより、これに反するを旋毛曲といふのである。もうここまで言へば、つむじが頂上を意味するのは自ら会得せられるであらう。十字街をその旋る状態より「つじ」と叫ぶのに対し、これはその在場所より頂上の意味となつた。これ言語發展の一例として興味あるものと思ふ。

而して山の頂きは「やまのちじ」屋根の頂きは「家のちじ」である。また沖繩的那覇市には辻町といふのがあ

用形を有し(まみむめノ如キ)摘とは関係なく捨る。旋るの如き意味を自体が持つてゐたのではないかと思ふ。随つて、

つむぐ「紡」摘み続く意力ト云フ

も、語原として一つの疑を持つものである。

成程「摘み続く」も紡ぐ工程の一要素には相違ないが、「紡車ニテ引キナガメ」即ち緩ることと、くだ(管)に巻くことによつて「つむがれる」のである。単に「摘み続く」ならばむしろそれは、うむ「績」「麻苧ヲ細ク拍キテ、長ク合セテ緩ル」ことである。

要するに、つむ「紡」は「つむぐ」の語幹で、而して緩る。巻くの意を有する語であり、「つむじ」の語根乃至は語根と関係密なる語ではないかと思ふのである。

南島方言・えらぶ語の研究 「第一輯」 畢

## 追記

この記録は安藤佳翠先生の「南島方言・えらぶ語の研究」の冊子を再記載したものである。次の点を考慮して

いただきたい。

- (一) 昭和九年十月二十五日発行の冊子である。
- (二) したがって現在使用されていない方言もあると思うが、後世研究される方の便宜のためすべてそのまま記載した。
- (三) 送りがなは原文のままとし、漢字は常用漢字で字体が変わっている字は常用漢字に直した。
- (四) 「第二輯」が見つからないため、語彙は「あ行」から「さ行」までで、「た行」以降の記載がなされていない。